

# 北京語の口語音と文語音

——特に中古中国語の曾・梗撰一・二等入声字を中心に——

佐 藤 昭\*

## The Literary and Colloquial Pronunciations In the Peking Dialect —with focus on the ru-sheng words of the Ancient Chinese Zeng and Geng rime-groups

Akira SATO

### §1. はじめに

現代北京語には、「多音字」、即ち、同一の漢字に二つないしそれ以上の異なった発音が備わっているものが豊富に存在するが、その中に、一方の発音が [-ei] [-ai] という形をとり、もう一方の発音が [-ə] [-o] という形をとって対をなしている語が多数ある。いまそのような例をいくつか拾い出して示すと、つぎの通りである<sup>1)</sup>。

伯	bǎi	bó	百	bǎi	bó
得	děi	dé	勒	lēi	lè
色	shǎi	sè	擇	zhái	zé

以上のような音韻対応のうち、現行の多くの字典・辞典では、[-ei] [-ai] と読むものを「口語音」（あるいは「白話音」「俗語音」とし、[-ə] [-o] と読むものを「文語音」（あるいは「読書音」「文言音」として、その相異を説明している。いわば、両者の間には用法上の区別が存在するわけであり、前者は口語的な語彙、言い回しに用いられることが多く、後者は文語的な語彙、言い回しに用いられることが多い、ということである。

歴史的にみると、このような音韻対応を有する漢字は、周知のように、大部分中古中国語の「曾撰」および「梗撰」に所属する入声の韻から来たものである。それ以外の「撰」から来たものとしては、わずかに「没」méi, mò（「臻撰」所属）があるにすぎない。では曾撰・梗撰に所属する入声字がすべて、同じような口語音と文語音の対応をもっているかという点、そうではない。同じ「撰」であっても、「力」「即」「直」「極」（以上曾撰）、「壁」「的」「積」「益」（以上梗撰）などの漢字は一種類の発音しかもっていない。つまり、この種の音韻現象は、『韻鏡』転図の用語を使っていうならば、「一等」と「二等」の漢字にしか行われぬものだけということである。そこで、本稿では以下において、便宜上、曾・梗撰一、二等入声字（より正確には、曾撰一等および曾撰正齒音二等、梗撰二等の入

\* 日・中・露語教室 (Dept. of Japanese, Chinese and Russian)

声字)を略して、簡単に曾・梗撰入声字と称することにする。

それではなぜ、北京語において、上述のような口語音・文語音という二通りの読みかたが同一の漢字のもとに並存しているのであろうか。この点については、たとえば岩田礼氏はつぎのような解釈を示された。即ち、北京口語音の基礎をなす方言を〈A方言〉とし、北京文語音の基礎をなした別の方言を〈B方言〉とすると、“B方言は有力な政治的・文化的背景をもってA方言に強い影響を与え、その結果、B方言の発音、つまり文語音がA方言の音韻体系の上ののった”，それで、両方言の別々の発音が共存するようになった、ということである<sup>2)</sup>。

ところで、もしそうであると仮定するならば、A方言に強い影響を与えたB方言とは具体的にはいかなる地方の言語をさすのか、という疑問が当然残るであろう。また、北京語の基礎をなすA・B両方言の発音上の差というのは、はたして異なる地域のものなのか、それとも同一地域、同一方言内部の階層的なものなのか、という新たな疑問も生じてくる。これらの疑問の点を解明するのはきわめて難しいことではあるが、本稿では、その問題解明への第一歩として、まず北京語と地理的・歴史的に最も関係が深いと考えられる北方諸方言と北京語とを対比してみ、北京の口語音・文語音がそれぞれ中国北方のどの方言と関連づけられるかという点を中心に考察してみようと思う。さらにまた、これに関連する問題として、これまであまり考えられることのなかった「深・臻」両撰の入声字（この場合、正歯音二等の「澀」「瑟」「蝨」などの漢字）についても、曾・梗撰の場合と同様、口語音・文語音という二種の発音があったのではないか、という推論を試みるものである。

## §2. 曾・梗撰入声字と北京語の読みかた

まず以下に曾・梗撰入声字を掲げ、それぞれの漢字の北京語での読みかたを、口語音と文語音の二系列に分けて並べて示してみる。漢字の例は、中国科学院語言研究所編『方言調査字表』科学出版社、北京(1964)に拠ったが、二、三省略したものもある。漢字の配列は、論述の便宜上、中古中国語における「声母」(音節初頭子音)の分類である「全清」「次清」「次濁」「全濁」に従って、この順序にした。

ところで、以下の表からも知られるように、すべての漢字に口語・文語の二音がそろって対応しているかという点、そうとは限らない。文語音があるだけでも一方の口語音が存在しないという例は少なくない。口語音の対応形がしばしば欠けているのはそれなりの理由があると考えられる。元來文語的で実際の日常生活にそれほど密着していない語は、仮にその口語音があったとしても、使用される機会もめったにないから、容易にすたれてしまうことになったのであろう。そこで一応参考のため、河北省昌黎方言の口語音の読みかたを、一部ではあるが、( )の中に入れて示しておいた<sup>3)</sup>。昌黎は北京から東方 80 km のところにあり、その方言は音韻的には北京語に非常に近似する体系をもち、曾・梗撰入声字についても、北京語と同様、口語音系と文語音系の両音が混在している。ただ北京語と異なる点は、[-ei] [-ai] の読みかたをするものがより規則的に、より広範囲に現われるということである。おそらく北京語においても、かつては、口語音の読みかたが今より

もっと豊富であったのではないか、と推測されるのである。

(1) 声母が全清音のもの

北 (曾撰一等)	běi , bèi (特)* <sup>1</sup>	bò
得 ( " )	děi , dǎi	dé
徳 ( " )	_____	dé
則 ( " )	_____ * <sup>2</sup>	zé
塞 ( " )	sāi , sēi (特)* <sup>3</sup>	sè
黒 ( " )	hēi , hěi (特)	hè
国 ( " )	_____	guó
仄 (曾撰正齒音二等)	zhǎi (特)* <sup>4</sup>	zè , zhè
側 ( " )	zhāi	cè , zè
色 ( " )	shǎi	sè , shè
伯 (梗撰二等)	bǎi (特)	bó
迫 ( " )	pǎi (特)* <sup>5</sup>	pò
百 ( " )	bǎi	bó
柏 ( " )	bǎi	bó
擘 ( " )	bāi	bò
槩 ( " )	_____ (昌黎 pai)	bò
摘 ( " )	zhāi	zhé
窄 ( " )	zhǎi	zé
責 ( " )	zhái* <sup>6</sup> (昌黎 tsai)	zé
格 ( " )	_____	gé
隔 ( " )	jiē , jiè (特) , jié (特)* <sup>7</sup>	gé , gē (特)
革 ( " )	_____	gé
赫 ( " )	_____	hè
嚇 ( " )	xià	hè
扼 ( " )	_____	è
輒 ( " )	_____	è

(2) 声母が次清音のもの

志 (曾撰一等)	tuī (dēi , duī)* <sup>8</sup>	tè
克 ( " )	_____ (昌黎 k'ei)	kè
刻 ( " )	kēi (昌黎 k'ei)	kè , kē
測 (曾撰正齒音二等)	_____	cè
魄 (梗撰二等)	_____ (昌黎 pai)	pò
拍 ( " )	pāi	pò
拆 ( " )	chāi	chè
策 ( " )	_____	cè

冊 ( " )	chǎi	cè
客 ( " )	———— (昌黎 tç'ie)*7	kè
(3) 声母が次濁音のもの		
墨 (曾撰一等)	———— (昌黎 mi)	mò
黙 ( " )	————	mò
勒 ( " )	lēi	lè , lē
肋 ( " )	lèi	lè
陌 (梗撰二等)	————	mò
脈 ( " )	mài	mò
麦 ( " )	mài	mò
額 ( " )	———— (昌黎 nie)*7	é
(4) 声母が全濁音のもの		
特 (曾撰一等)	————	tè*9
賊 ( " )	zéi	zé
或 ( " )	————	huò
惑 ( " )	————	huò
帛 (梗撰二等)	bái*8 (昌黎 pai)	bó
白 ( " )	bái	bó
擇 ( " )	zhái	zé
澤 ( " )	zhái*8 (昌黎 tsai)	zé
宅 ( " )	zhái	zhè
核 ( " )	————	hé
獲 ( " )	huái (特)	huò
劃 ( " )	huai (特)*10	huà*10

## 表の注

- \*1 (特)とあるのは特別な発音ということで、特殊な意味又は語彙にしか用いられないもの。
- \*2 李任徳主編『最新漢英大辞典』中国図書出版公司 香港(1956)では「則」に tsê と tsei の二音を与えている。このうち tsei という読みかたは他の辞書には記載されていないが、ありえない音ではない。
- \*3 大阪外国語大学中国語学研究室編著『中国語発音字典』(1949)によると、sēi というのは、“隙間がつまるという意味の場合の sāi の又読”だという。なお、sāi という音を、長田夏樹氏は「塞」sài (もと蟹撰一等代韻去声の字)への類推によるものだとしている。「北京文語音の起源について」中国語学研究会会報 第11号(1953)参照。
- \*4 「仄」は zè であるが、「仄歪」の場合特別に zhǎi という発音をする。徐世榮氏はこの音を北京の「土音」とみなしている。「北京話裏的土詞和土音」中国語文 第57期(1957)による。
- \*5 「迫撃砲」の場合に特別に pǎi と発音する。『新華字典』1965年修訂重排本、商務印書館などによる。
- \*6 「責」「帛」「澤」の口語音は、一部の古い辞書には記載されているが、現行の大部分の辞書には記

載されていない。おそらく、この読みかたは今日実際の言語のなかで使用されることがほとんどなくなったのであろう。

- \*7 昌黎方言では、梗撰二等の「牙喉音」を声母とするいくつかの漢字は、予想される -ai という形を示さず、-ie という形になっている。北京語の「隔」jiē·jiè·jié はこの系列の読みかたである。この ie なる形は相当古くから存在したと考えられるもので、『中原音韻』(1324)にもすでに記載されている。なお、河南省洛陽方言では牙喉音でも ai という形を保っている。「格」gai 「客」kai など。「洛陽方言詞彙」『方言与普通話集刊』第六本所収(1959)参照。
- \*8 『井上中国語新辞典』江南書院(1954)，“Concise Dictionary of Spoken Chinese” Harvard University Press (1966)によると、「恣」は北京方言では dēi 又は duī と読まれるという。ui よりは ei のほうが規則的な対応形といえるが、声母が無気音であるのは不規則的である。
- \*9 「特」が全濁音声母をもつとすれば tè という音は不規則であるが、平山久雄氏によれば、この字はもと韻書に記載されない次清音声母をもつ形があって、tè はそれに由来するものであろう、という。「中古入声と北京語声調の対応通則」日本中国学会報 第十二集(1960)による。
- \*10 「劃」の口語音 huai は、『新華字典』に「刮劃」bāihuai とあるのによる。一方、huà を文語音とするか口語音とするか不明であるが、口語音に huai を挙げたので、一応文語音に入れておく。なお、平山久雄氏は「劃」の音 huà は、「畫」huà (蟹撰合口二等卦韻去声)に類推したものであろうとする。平山氏前掲論文による。

### §3. 曾・梗撰入声字の声調面の変化

中古中国語の入声は他の声調と異なり、子音韻尾 [-p, -t, -k] (あるいは [-p, -t, -c, -k])<sup>4)</sup>をもつものであった。今日でも南方方言ではこの韻尾を残しているが、揚子江以北の中国語では、一般に[-ʔ] (声門閉鎖音)に変化させるか、あるいは完全に消失させた。

ところで、曾・梗撰入声の場合はその子音韻尾が変化し消失する状況が、A方言(口語音系)とB方言(文語音系)とで異なっていた。つまり、A方言では入声韻尾は -i にかわり、B方言では脱落してゼロとなったわけであるが、これは、主として、北京口語音が i 韻尾をもち、文語音は韻尾をもっていない、つまり韻尾がゼロであるという理由によるものである<sup>5)</sup>。

一方、主母音のほうに目を転じてみると、口語音は [e] [a] を有し、文語音は [ə] [o] を有している。このうち、口語音の二つの母音 [e] と [a] (音韻的には /ə/ と /a/) は、大体中古中国語の曾撰・梗撰という二つの撰の音韻上の区別に対応しているものと判断される。なぜなら、曾撰正歯音二等が規則的に -ai となることを別にすれば<sup>6)</sup>、曾・梗二撰と現代の北京口語音との間には、

中古中国語の曾撰——北京 -ei

中古中国語の梗撰——北京 -ai

という、きわめて整然とした対応関係が認められるからである。これに対し、文語音の [ə] [o] (音韻的には共に /ə/) は、曾・梗二撰の区別に対応するものではない。主母音が [ə] をとるか [o] をとるかは全く声母の違いによるにすぎず、声母が唇音のとき、又は合口介音を伴うときに [o] が現われるのである。この二つの母音は、従って、曾・梗撰

が合流を行った後の母音の形を示しているものとみなされよう<sup>7)</sup>。

つぎに、中古の入声は、その子音韻尾を消失させた後いかなる声調に変化し混入したかを、いくつかの北方方言についてみてみよう。下の表はその変化・混入の状況を示したものである。

表I<sup>8)</sup> 北方方言における中古入声の声調変化

方言	中古声母	全 清	次 清	次 濁	全 濁
北京, 天津, 沈陽		陰平・陽平・上声・去声に分入		去 声	陽 平
濟 南		陰	平	去 声	陽 平
山 東 黄 県		上	声	(不 定)	陽 平
旅 大		上	声	去 声	陽 平
遼 陽		陽 平	去	声	陽 平
開封, 洛陽, 徐州		陰		平	陽 平
西 安		陰		平	陽 平
蘭 州		去		声	陽 平
成 都, 重 慶		陽		平	

この表からも知られるように、各方言とも、入声が具体的にどの声調に変化するかは、大体声母の「清・濁」の区別によって決まっている。しかしながら、入声が変化した後の声調の分布状況はというと、方言によって一様ではなく、実に多種多彩なのである。

ところで、北京語の声調分布をみると、まず次濁と全濁はそれぞれ去声、陽平へと、かなり規則的に変化したのであるが、全清と次清は四つの声調すべてに分散して混入している。一見すると、その混入のしかたはきわめて無原則的に行われているかのようである。しかし、これももっと子細に観察すると、それほど混乱した状況にはなっておらず、やはりそれなりの規則性が発見されるのである。平山久雄氏はその論文「中古入声と北京語声調の対応通則」において、語を口語的なものと文語的なものとに分けて、それぞれの場合の声調分布をつぎのような図に示された。

中古声母	全	清	次 清	全 濁	次 濁
	I	II			
北 京					
口語的語根	陰 平, 上 声			陽 平	去 声
文語的語根	陽平, (去声)		去 声	陽平, (去声)	去 声

図の注) ○全清IIは、影母および非心生書曉の諸母(現在摩擦音になっているもの)、全清Iはそれ以外の諸母。

○図中の( )はもとの平山氏の図にないものであるが、比較的少数の場合であることを示すしるしとして筆者が付したものである。

本稿ではすでに、§2において、曾・梗挿入声字とその発音を口語音と文語音とに分けて掲げたが、試みにそこでの声調分布を整理し抽出して平山氏の図と突き合わせてみると、両者はほとんど一致した傾向を示すことが認められる。

さらに、平山氏の考察するところに基づいて、上の図に関するいくつかの重要な事実を掲げると、つぎの通りである。

- a. 中古の全清・次清は、口語的語根では上声と陰平になり、文語的語根では陽平と去声になった。
- b. 口語的語根のうちで、動詞的語根は大部分陰平になり、名詞的語根は上声と陰平になった。名詞的語根で特に「子」などの軽声の語尾をとるものは陰平になっているものが多い。形容詞的語根についてははっきりした傾向が見出せない。
- c. 文語的語根のうちで、全清Ⅰは陽平となり、全清Ⅱおよび次清は去声となった。

さてこの中で一番筆者の目を引くのは文語的語根の声調分布である。なぜなら、これは先に掲げた表Ⅰの中の遼陽方言（遼寧省）の声調分布ときわめて類似するからである。周孝若氏「東北入声的演變」によると、遼陽方言では全清声母のうち、見端知照精の諸母は陽平となるものが多く、心審曉の諸母は去声となるものが多いという。つまり、同じ全清声母であっても、閉鎖音・破擦音のものと摩擦音のものとは変化の方向が異なるというわけである。このような変化現象は他の方言にもあまり見られないもので、この現象を有するという点で、北京文語音と遼陽方言は非常に親近な関係にあるといわざるをえない。もっとも、周孝若氏の報告は声調方面に関するものだけで、音韻体系全般にわたるものではないから、上述の共通点だけで両方言を直結させるのは行き過ぎと思われるが、それにしても、北京からそう遠くないところに同じような特色を有する方言が見出されることは注意してよいと考えられるのである。<sup>9)</sup>

北京文語音と遼陽方言に共通する変化現象のうち、さらに興味ぶかいのは、つぎのような特徴的な対応関係についてである。

全清Ⅰ（無気の閉鎖音・破擦音系統）——陽平

次清（有気の閉鎖音・破擦音系統）——去声

つまり、声母が無気か有気かの違いによって異なった声調へ変化したというわけであるが、このことが注目されるのは、なお他にもこれに似たような現象を有する方言が存在するからである。さて、慶谷寿信氏によって紹介された湖北省通山方言は、つぎのような入声変化に関する特色をもっている<sup>10)</sup>。

- a. 中古の全濁の入声は、[-ʔ]という韻尾を保つものと、それを失って陽去声に合流するものとの二種類がある。
- b. 声母が無気音をとるものは陽去声になるものが多い。これに対し、声母が有気音をとるものは全部[-ʔ]を保っている。
- c. 無気音・有気音のどちらにも属さない摩擦音グループは、陽去声になるものと[-ʔ]

を保つものがあり、どちらが規則的とも言いがたい。

以上のことがらに注目された慶谷氏は、入声韻尾の消失過程を問題にするさい、声母における **aspirate** の有無をも考慮に入れなければならないことを指摘された。これと同じことは、おそらく北京文語音・遼陽方言についても言いうるのではないかと考えられる。

北京文語音は、北京口語音のほうがかなり早い時期に **-i** 韻尾をもつようになったのは逆に、むしろ入声韻尾を遅くまで（おそらく **[-ʔ]** という形で）保存した方言だと考えられる。そしてこの韻尾もある時期には消失することになるわけであるが、ただその消失は一挙に行われたものではなくて、おそらく段階的に行われたものであろう。上述の湖北省通山方言の例を参考にして判断するならば、まず無気音のものが比較的早く韻尾を消失させ、時をへだてて、有気音のもの・摩擦音のもの（この両者は入声韻尾との結合が比較的緊密であったのかもしれない）がこれに続いたと考えられる。こうした韻尾消失過程における変化現象の遅速の差が、いわば今日において、陽平・去声という声調面での相違となって現われているのだと理解されるのである。

#### §4. 北方諸方言における曾・梗摄入声字

次には、まず中古中国語の曾・梗摄入声字が北方官話諸方言においてどういう状態になっているかを見、そして北京の口語音・文語音がそれぞれ、これら諸方言の中のどの方言と関係づけられるのか、という問題を考えてみることにする。

さて、北京口語音は、入声韻尾を相当早くからなくし母音韻尾を発達させた方言の系統（いわゆる「失入方言」<sup>121</sup>）に属するのに対し、北京文語音は、逆に、入声韻尾を長い間保存してきた方言の系統（いわゆる「存入方言」）に属する。ところで北方方言では、入声韻尾を消失している方言が多いのであるが、山西省および河北省・河南省の一部の方言では、今日でも依然入声韻尾を **[-ʔ]** という形で保っている<sup>122</sup>。それでは、同じ「存入方言」の系統に属するものとして、北京文語音とこれらの方言とをそのまま単純に結びつけていいかという、そうはいかない。なぜなら、北京文語音と違って、これら入声韻尾を有する方言には、しばしば中古の曾・梗の区別を保存しているところがあるからである。とすれば、そのような「存入方言」はむしろ北京口語音と結びつけなければならなくなってしまふ。そこで、結局本稿では、中古入声を保存するかしないかという分けかたにはよらないで、中古の曾・梗を区別するかしないかという点を基準にして北方諸方言を分類することにする。以下、(イ)中古の曾・梗を区別しない方言、(ロ)中古の曾・梗を区別する方言、という順序で考察を加えていく。なお便宜上、曾・梗正歯音二等については次節で扱うことにして、ここでは除く。

(イ)中古の曾・梗を区別しない方言



表 II<sup>13)</sup>

方 言	曾・梗撰入声	方 言	曾・梗撰入声
北京文語音	ə, o (唇音)	濟南, 安丘(山東)	ei
昌黎文語音 (河北)	ɤ, uo (唇音)	平度, 寧陽 (山東)	ei
靈 寿 (河北)	ə, ie	徐 州 (江蘇)	e (<ei)
黃 県 (山東)	ɤ	西安, 咸陽 (陝西)	ei
安嶺屯 (山東方言系)	ə	平 涼 (甘肅)	ɛi
魏 県 (河北)	ê ([ɛ]か)	靈 宝 (河南)	ɤ (牙喉), ie (舌齒)
開封, 鄭州 (河南)	ɛ	懷 慶 (河南)	a

以上は、中古の曾・梗撰を区別しない方言で、おそらく曾・梗撰が合流した後成立した音形を伝えているものと考えられる。大別すると、a) [ə][ɤ]又は[ɛ]のように単韻母になるものと、b) [ei][ɛi]のように -i 韻尾を含む複韻母になるものがある。いま北京文語音と西安方言とを例にとって、それぞれの推定される音韻変化の過程を図示してみると、大体つぎのようになる<sup>14)</sup>。

北京文語音 曾撰 ək > ək > əc > əc > əʔ > ə  
 梗撰 ɛc・ac > ac > ac

西 安 曾撰 ək > ək > əc > əc > əi > ei  
 梗撰 ɛc・ac > ac > ac

つまり、曾・梗撰が合流して əc となった後、əc > əʔ > ə と韻尾を脱落させていったのが北京文語音であり、一方、əc > əi > ei と韻尾を母音化させていったのが西安方言である(山東省の多くの方言も同様)。そこで、この韻尾における音韻変化のしかたの相違という点で、両者は明瞭な対立をなしているといわなければならない。

つぎに北京文語音と同じ変化の過程をたどったと考えられる方言についてみる。まず昌黎方言であるが、この方言は、本質的に北京文語音との差異はなく、近似しすぎて対比の相手とするにはあまりふさわしくない。また山東黄県方言は、北京文語音と結びつけるにはやや地理的に離れすぎている。これに対し、最も注目し値すると思われるのが靈寿方言である。この方言は北京に地理的にも近いし、中古入声との音韻的な対応のしかたも北京語とほとんど一致する。ただ若干異なるところは、曾・梗撰入声字に対応する形としては、北京文語音は規則的に [ə] (唇音では [o]) を示すのに対し、この方言では [ə] になるものと [ie] になるものとの二種類がある(たとえば則得徳刻克格革客額迫は -ə, 拆澤擇策冊百柏塞は -ie, この他に北得黒は -ei), ということである。しかし、この方言の一大特色であり、そして特に興味ぶかいのは、中古入声が保たれるということである。ただし入声韻尾は存在しない。つまり、入声は、他の方言のように去声や陽平に合流するというのではなく、それだけでまとまって独自の調値を形成しているのである。おそらくこの方言でも、ある時点までは入声韻尾が備わっていて、それがその後の音韻変化で脱落した

ものであろう。そしてそのような入声変化の状況は、おそらく、同じように遅くまで入声韻尾を保ってそして消失させたとみられる北京文語音とも、ほとんど軌を一にするものではないかと考えられるのである。以上によって、筆者は、北方方言において、北京文語音の性格を考える上で最も密接に関係づけられると思われる方言として、靈寿方言を挙げるものである。

(ロ)中古の曾・梗摂を区別する方言

表 III<sup>13)</sup>

方 言	曾 摂	梗 摂	方 言	曾 摂	梗 摂
北京口語音	ei	ai, (ie)	沽 源(河北)	əʔ	aʔ
昌黎口語音(河北)	ei	ai, ie	張 家 口(河北)	əʔ	aʔ
河 間(河北)	ei	ai	邯 鄲(河北)	ə, ie	a, (ia)
洛 陽(河南)	ei	ai	文 水(山西)	ə, iʔ	aʔ, iaʔ
襄 城(河南)	ei, ai	ai	大 同(山西)	ə, iə	a, ia

以上は、中古の曾・梗摂を未だ区別する方言である。北京口語音から襄城方言までのグループは、ほぼ曾摂：-ei, 梗摂：-ai と対応しており、沽源から大同までのグループは入声韻尾をもっていて、方言によって対応の混乱は少なくないが、大体において、曾摂：-əʔ, 梗摂：-aʔ というように対応している（この対応は、沽源方言において最も整然とした形でみられる）。これら両者は、曾・梗摂が合流する前の段階の、それぞれの摂の、いわば中古音形を反映しているものと考えられる。いま北京口語音を例にとり、その音韻変化の過程を図示すると、つぎのようになるであろう。

曾 摂 ək > ək > əc > əi > ei

梗 摂 əc・ac > ac > ac > ai > ai

ところで、北京口語音など、今日 -ei・-ai 形を有する方言は、前述したように、相当早い時期に入声韻尾を母音化させ、入声としての特色を完全に失ってしまったものである。従って、すでに入声から分離してこれとは全く読みかたを異にする形を有する方言を、今日なおも入声韻尾を有する保守的な方言と結びつけるわけにはいかないであろう。

とすれば、北京口語音と結びつけられるのは、河北省のいくつかの方言を別にすれば、河南の洛陽・襄城方言ということになるだろう。ちなみに、北京と河南を結ぶ南北の線を中心とする一帯には、北京口語音と同種の読みかたをする方言がかなり分布するようなのである。『河北方言概況』によれば、河北省のいくつかの方言では、梗摂入声字である「擇」「澤」「責」「策」を[-ai]型の韻母でよむという<sup>15)</sup>。そのような方言として、主な地名を挙げると、涿県・定興・容城・黄驛・塩山・阜城・臨城・平郷・邢台などで、河北省の中部から南部にかけて相当広い範囲にわたって分布している。従って、北京口語音の性格ということの問題にする場合は、やはり、これら河北省中・南部および河南省各地の方言を無視し

てすますわけにはいかないと考えられるのである。

### §5. 曾撮および深・臻撮入声の正歯音二等字の口語音

曾撮入声正歯音二等に所属する漢字、たとえば「色」「側」などは、すでにみてきたように、口語音 [-ai] と文語音 [-ə] の二種の形を有している。このうち口語音のほうは、同じ撮の一等に所属する「北」「賊」「黒」などが [-ei] の音形をもつものに対し、梗撮二等の漢字（たとえば「白」「宅」「麦」「窄」など）の口語音と同形である。もともと曾撮は、中古中国語においては /ə/ 系主母音を有し、/a/ 系主母音を有する梗撮とは相互に区別され、相対立するものであった。しかしその後の「色」「側」などにおける主母音の変化 /ə/ > /a/ によって、両撮は、部分的にはあるが、合流を引き起こしたわけである。

ところで、このような正歯音二等字の /ə/ > /a/ という音韻変化は曾撮だけに起こったのかというと、そうではない。止撮および臻撮入声の合口などにおいても、同じような変化が中古以後に起こったのである。そのような例としては、「揣」 chuǎi 「衰」 shuāi 「帥」 shuài (以上止撮合口)、「率」「蟀」 shuài (以上臻撮合口) などがある。これらは合口の字であるけれども、その変化の様式は「色」「側」などの場合と本質的に同じものと考えられる<sup>16)</sup>。

さて、中古深・臻撮入声所属の「澀」「瑟」「蝨」などは、「色」「側」と同じ正歯音二等の漢字である。いまこれらの北京音をみると、それぞれ sè, sè, shì と読まれ、一種類の発音しかもたず、たとえば「色」が sè と shǎi の二音をもっているのは必ずしも平行しない。それでは北京語において、これら「澀」「瑟」などは /ə/ > /a/ という変化を引き起こさなかったのであろうか。これを問題にするあたり、まず以下に、北方方言における深・臻撮および曾撮入声の正歯音二等字の状態を掲げてみることにする。

表 VI<sup>17)</sup> 北方方言における深・臻撮および曾撮入声正歯音二等字の状態

	例字 方言	深・臻撮			曾撮		側 (r)
		澀 (深)	瑟 (臻)	蝨 (r)	色 (曾)	齋 (r)	
(A)	濟南	ʃei	ʃei	ʃi	sə(文), ʃei(口)	ʃei	ts'ə(文), tʃei(口)
	安丘	ʃei	ʃei	—	ʃei	ʃei	tʃ'ei
	寧陽	sei	sei	—	—	sei	ts'ei
	西安	sei	sei	sei	sei	sei	ts'ei
	平涼	(瀾)sei	sei	—	sei	—	ts'ei
(B)	河間	sī	sai	—	sai	sai	tsai
	洛陽	sai	—	sai	sai	—	zai
	襄城	ʃai	—	ʃai	ʃai	—	tʃai
	邢台	-ai	-ai	—	—	-ai	-ai

(C)	沽 源	-aʔ	-aʔ	—	—	-aʔ	-aʔ
	邯 鄲	-a	-a	—	-a	-a	-a
	文 水	sə	—	səʔ	saʔ	saʔ	ts'aʔ
	大 同	(瀋)sa	sa	—	sa	—	(測)ts'a

表の注) (文)とは文語音, (口)とは口語音のこと。

(A)は、中古の曾・梗摂を合流させ、しかも入声韻尾を母音化させた方言のグループである。これらの方言では、「澀」「瑟」なども -i 韻尾を有するという点で、曾摂字と全く軌を一にした形になっているのが注目される。(B)と(C)は、中古の曾摂・梗摂を区別する方言で、そのうち(B)は早期に入声韻尾をなくして -i 韻尾を成立させた方言のグループであり、(C)は今だに中古入声を何らかの形で保つ方言のグループである。おもしろいことに、(B)(C)いずれの方言でも、入声を失うか保つかの別に関係なく、「澀」「瑟」など深・臻摂入声字は、「色」「側」と共に規則的に [-ai] 又は [-aʔ] となって梗摂所属字と合流している。ただし、文水方言だけは深・臻摂と曾摂とは異なった形をもって、やや異質である。

このようにみえてくると、(B)方言の一員とみなされる北京口語音で、「澀」「瑟」などがなんら「色」「側」と音韻的に平行した状態を示さない、というのはいささか不自然である。やはり、現在行われている [sə] ないし [sɿ] という読みかた（これは文語音系統のものであろう）とは別に、一種の口語音というべき [sai] なる音が、かつて北京語の中で行われたことがあるのではないだろうか。臻摂合口の「率」「蟀」がすでに [ʃuai] という口語音の形で実際用いられているからには（「蟀」にはこの他に [ʃuo] という文語音がある）、同じ摂の開口の側に位置する「瑟」などが、これら合口の漢字と行動を共にして、母音 /ə/ > /a/ の変化をおこし、その結果として、[sai] なる音を有していた可能性は少なくないと考えられる。もしそういう音が実際に存在していたと仮定するならば、それらが今日伝わっていないのは、何らかの理由ですたれてしまったからなのだ（多分、文語音の強い影響によるものか）と推測するわけである。

#### 注

- 1) 北京語の発音表記としては、便宜上拼音ローマ字を用いることにする。
- 2) 「舌歯音 2 等声母の非捲舌化について」中国語学 225 (1978) 参照。
- 3) 昌黎方言は、河北省昌黎県誌編纂委員会・中国科学院語言研究会合編『昌黎方言誌』科学出版社 (1960) による。以下も同じ。ただし声調の表示は省略した。
- 4) 中古中国語に [-p, -t, -c, -k] の四種の韻尾を区別するという説は橋本萬太郎教授による。“Internal Evidence for Ancient Chinese Palatal Endings” Language Vol. 46-2 (1970), 「朝鮮漢字音と中古中国語高口蓋韻尾」アジア・アフリカ言語文化研究 7 (1974), “Phonology of Ancient Chinese” Vol. I, Study of Language & Culture of Asia & Africa, Monograph Series No. 10 (1978) pp. 182-222 参照。

なお、橋本説による中古中国語の曾・梗摂所属韻の再構音はつぎの通りである。曾摂一等 [əŋ(登)/ək(徳)] 梗摂二等 [aɲ(庚)/ac(陌)] [eɲ(耕)/ec(麦)]

- 5) 長田夏樹氏は、曾・梗撰入声字について、つぎのような音韻変化の過程を想定された（同氏「北京文語音の起源に就いて」参照）。
- |       |      |                             |
|-------|------|-----------------------------|
| 文語音体系 | 曾撰一等 | ək (中古) > əʔ > ə, o (北京)    |
|       | 梗撰二等 | ɛk・æk (中古) > əʔ > ə, o (北京) |
| 口語音体系 | 曾撰一等 | ək (中古) > əg > əi (北京)      |
|       | 梗撰二等 | ɛk・æk (中古) > əg > ai (北京)   |
- 6) 曾撰正歯音二等の漢字が曾撰一等と袂を分かって梗撰二等と合流するに至ったことについては、§5 において別途に問題にする。
- 7) 曾・梗撰合流の方向とその音韻のプロセスについては、拙論「中古中国語の曾撰梗撰合流の進行過程」集刊東洋学 29 号 (1973) 参照。
- 8) この表は、主として、中国語文雑誌社編『語言調査常識』中華書局 北京 (1956) p. 50 所収の「漢語古調類在现代方言中的現代調類和調値対照表」に基づく。その他の資料としては、山東黄県：「山東黄県方言音与北京語音的対応」『方言与普通話集刊』第八本 文字改革出版社 (1961)，旅大：「遼寧語音説略」中国語文 123 期 (1963)，遼陽：周孝若「東北入声的演變」国語週刊 41 (1932)，洛陽：「洛陽話浅説」『方言与普通話集刊』第二本 (1958)，徐州：『江蘇省和上海市方言概況』江蘇人民出版社 (1960) による。なお、成都・重慶は北方方言とはいえないが、参考のために挙げておいた。
- 9) 遼陽方言のこのような声調分布は、あるいは北京文語音の強力な影響によるとも考えられる。
- 10) 「音節構成と音韻変化——湖北方言における入声韻尾消失の過程——」名古屋大学文学部研究論集 XLIII (1967) 参照。
- 11) 「存入方言」「失入方言」という名称は、藤堂明保「官話の成立過程からみた西儒耳目資」東洋学 第 5 輯 (1952) による。もっとも、藤堂氏は“古官話”および“近代官話”の方言の分類に用いたものであるが、本稿では、便宜上、現代の北方方言を分類する用語として用いている。
- 12) 「漢語方音的幾個問題」『方言與普通話叢刊』第 1 本 (1958) 表 5・3 (p. 170) 参照。
- 13) 表 II および表 III で使用した方言資料はつぎの通り。靈寿・沽源・邯鄲：河北北京師範学院，中国科学院河北省分院語文研究所編『河北方言概況』河北人民出版社 (1961)，安嶺屯：有坂秀世「山東系の一方音について」『国語音韻史の研究』（増補新版，三省堂 1957）所収，開封・平涼・懷慶・大同：B. Karlgren 著，趙元任等訳『中国音韻学研究』中の「方言字彙」，濟南・西安：北京大学中国語言文学系語言学教研室編『漢語方音字匯』文字改革出版社 (1962)，鄭州：袁家驊等『漢語方言概要』文字改革出版社 (1960) の「韻母表」(pp. 26-28)，徐州：『江蘇省和上海市方言概況』，咸陽：劉文錦「記咸陽方言」歴史語言研究所集刊 3・3 (1932)，靈宝：楊時逢・郝允敬「靈宝方言」清華学報 新九卷一二期合刊 (1971)，河間：張洵如「河間方言一變」国語週刊第 56 期 (1932)，張家口：野村正良「張家口方言及包頭方言に於ける声類——いわゆる西北諸方言との比較——」名古屋大学文学部研究論集 X-4 (1955)，平度：『方言与普通話集刊』第二本 (1958)，寧陽・襄城：同第三本 (1958)，魏県・洛陽：同第六本 (1959)，文水：同第七本 (1959)，安丘：同第八本 (1961)
- 14) 曾撰・梗撰入声字の中古音形は橋本萬太郎教授に従う。
- 15) 同書 pp. 40-41 参照。
- 16) この種の音韻変化が起こったのは、すべて中古中国語において捲舌音声母を含む音節である。橋本教授はこの変化を、捲舌音に自然に伴う唇音化のために起こったものとしている。「朝鮮漢字音と中古中国語高口蓋韻尾」(pp. 63-66) を参照。
- 17) 方言資料は、いずれも注 13) に掲げたものによる。